教育部会用自己点検・評価報告書（様式１）

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：法と政治
部会長名：馬場健一
作成者名：馬場健一

概要（2000 字）

１．実施体制

平成 27(2015)年度の「法と政治」教育部会は，国際文化学研究科 4 名，人間発達環境学研究科 3 名，法学研究科 4 名，海事科学研究科 1 名，国際協力研究科 1 名,日欧連携教育府 1 名の教員 14 名から構成され，部会長 1 名，幹事 1 名が世話役になり運営されている。

２．開講科目と実施状況

当部会は，以下に見る年間２１コマの教養原論科目のほか，年間１コマの教員免許資格のための科目である「日本国憲法」（２単位），年間２コマの共通専門基礎科目「日本国憲法」（２単位）（経済学部，経営学部対象）を担当している。これら「日本国憲法」は毎年非常勤講師に依頼をしている。教養原論科目は，すべて２単位科目であり，「法の世界」（４コマ），「社会生活と法」（４コマ），「国家と法」（５コマ），「政治の世界」（３コマ），「現代社会と政治」（５コマ）の５科目が開講されている。これら教養原論科目は，その科目の性質上，法学部が要件外指定学部とされているが，それ以外の学部の学生全てに開かれており，本年度も従来通り相当数の学生が，それぞれの科目を受講している。２１コマの，部会構成員間での担当割合は，国際文化学研究科所属担当者が９コマ，人間発達環境学研究科所属担当者が３コマ，法学研究科所属担当者が４コマ，海事科学研究科所属担当者が４コマ，国際協力研究科所属担当者が１コマとなっている。

講義形式は，一般の教室講義形式で行われるものが主であるが，中には双方向的，対話形式をとり，毎回すべての受講生に予習として,簡単なショート・エッセイを作成させたうえで,クラスをいくつかの小グループに分け,相互に疑問・批判を発表してもらうという討論形式で授業を進めていくものもある。

成績評価は，期末試験によって行うものおよびレポート提出によるもの主であるが，科目によっては，授業中に行う判例報告で報告した場合や，裁判傍聴レポートまたその他のレポートを提出した場合，授業中の発問に対して積極的に答えた場合，などを期末試験に加えた加点要素とするものもある。講義ごとにコメントペーパーの提出を求める科目もある。対話形式の科目においては，ショート・エッセイやプレゼンテーションとディスカッション最終レポートの内容をもとに成績評価をしている。

３．教育の現状とその評価

現代社会における法と政治の機能や役割について，下記のように多角的な視点と多様な方法によって講義が行われた。

(1)「映像で見る法と社会」として，視聴覚教材等を活用し，法学を専門としない受講生にとっても身近かつわかりやすい社会生活に関わる法学入門講義を行った。

(2)法学初心者向けの講座として、法学検定試験や公務員試験の問題を用いて、とっかかりやすくした。

(3)具体的事象を取り上げながら、変容しつつあるグローバル社会の現状を把握することを狙いとした。覇権構造の転換、グローバル格差の矛盾、新しい社会制度希求の動きを取り上げた。

(4)教科書を基盤にしつつ、各国や地域からの視座を学ぶための事例についての VTR 鑑賞と講義とを織り交ぜた。講義・VTR の内容を受けての考察を、コメントペーパー記入の形で数回その場で行ってもらった。これにより現代の国際政治の大枠と、国や地域からの目線の多様性を考察し、国際関係を形づくる理念や価値観の多様性と、その相互理解の必要性について理解を深めた。

(5)日本政治を対象に、比較の視点も踏まえつつ、政治学の基本的な分析枠組みや理論についての講義を行った。また、BEEF を活用して、各回のテーマに関連した事前文献をアップし、事前学修を求めた。

(6)日本政治の特徴と 1990 年代中葉以降の一連の改革によって、日本政治がどのような方向に変化しつつあるのかについて、講義を行った。また、BEEF を活用して、各回のテーマに関連した事前文献をアップし、事前学修を求めた。

(7)現代国際社会がどのような構造をしているのか、実際にどのように動いているのかを「国際社会の平和」というテーマをみていくことによって理解する。そのために講義の最初で国際法の基本原則を学び、その上で諸国家が戦争、武力行使を禁止する法をいかに醸成していったか、そうした努力にもかかわらず生じた国際的な紛争はなぜ起こり、どんな問題があるのか、を理解する。

(8)人々の生活や社会のありようが急激に変化しているベトナムを主な例として取り上げ、現地の実態を紹介しながら、関連する法制度の整備状況や問題点を説明した。

(9)現代中東の政治・社会を主題に、その特徴と背景について理解を深め、一方的な偏見や思い込みではなく相互理解をもたらすための知識と思考を定着させることを目的とする講義を行った。具体的には、現代中東の形成期である 20 世紀初頭から現在までの政治史と各国政治、主要な宗教であるイスラームの教えと実践、イスラームと政治の関わりや現在の中東政治の変動の原因となっているアラブの春をテーマとして取り上げた。

(10)本講義では、現代における格差(貧困や不平等)、労働問題、災害などの様々な社会問題について考察しながら、それらの問題の当事者の声を政治および政策に反映させる仕組みの構築（住民、当事者の政策参加）の重要性や、民主主義について考えを深めることを目標とする。

(11)マイケル・サンデルの『これからの「正義」の話をしよう』(早川書房)を教科書にして，現代世界において鋭い対立を生む社会問題の背景にはいかなる思想・信念が横たわっているのかを，グローバル・ディスカッションを交えて学習する。

(12)雇用、社会保障をめぐる法的問題など、卒業後の社会生活を送るに当たって重要と思われる事柄を素材として、「要件」「効果」といった法の基本的な考え方を把握させ、かつ、「不法行為」「契約」など民法の基本的な事項から説き起こした上で、講義を行った。

(13)日本国憲法の基本理念と具体的な条文、権利の内容、統治のシステムについての理解を行った。体系のある科目なのでそれに沿うが、トピックを用いての教育も行った。

４．外部評価委員会

本年度，本部会は，外部評価委員会を開催し，組織運営体制について自己診断報告を行い，４名の部会員から自己の担当講義につき報告を行い，３名の外部評価委員から評価と意見をいただき，長時間にわたって質疑応答，意見交換を行った。そのための資料として大部の自己点検・評価書をまとめるとともに，委員会の様子を含めた外部評価報告書も作成した。これらの営為を通じて，部会の現状と課題を深く検討することができ，自己点検・自己評価に大いに貢献することができたと考えている。

教育部会用自己点検・評価シート（様式１）

項目・観点ごとの記述

基準５　教育内容及び方法

５－１【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ，それに基づいて教育課程が体系的に編成されており，その内容，水準が授与される学位名において適切であること。】

５－１－③：　教育課程の編成又は授業科目の内容において，学生の多様なニーズ，学術の発展動向，社会からの要請等に配慮しているか。

観点に係る状況（150 字以上）
法学，政治学両分野に渡る異なる科目の存在，同一名の授業科目においても内容が多様であること，複数の研究科に渡る様々な専門分野の担当者のありようなどから見て，学生の多様なニーズに応えるものであるし，担当者の学術水準から見て，学術の発展動向や社会からの要請等に配慮しているものであると言える。ただし，部会の構成の事情により，必ずしも体系化された授業科目の編成になってはいない。
根拠資料　シラバス，教員用自己点検・評価シート（様式２），外部評価委員会

５－２【教育課程を展開するにふさわしい授業形態，学習指導法等が整備されていること。】

５－２－①：　教育の目的に照らして，講義，演習，実験，実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり，それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

観点に係る状況（150 字以上）
部会の提供する講義内容の特性に応じ，講義形式で行われる授業が多くであったが，その中で授業中に学生に発言を求めたり，報告をさせたり，視聴覚教材を適切に活用するなど，様々な学習指導法が採用されていた。また，裁判傍聴などの課外での活動のレポ

ートを要求することもなされており，全体として多様かつ適切な学習指導がなされていた。
根拠資料　シラバス，外部評価委員会，授業評価アンケート結果

５－２－②：　単位の実質化への配慮がなされているか。

観点に係る状況（100 字以上） 期末試験による評価のみにとどまらず，多くの科目において，各種レポート，授業中の報告・発問への応答，授業後のコメントペーパー，ショートエッセイ等の提出などを求めるなど，様々な方法を用ることによって単位の実質化への配慮がされていた。
根拠資料　シラバス，外部評価委員会

５－２－③：　適切なシラバスが作成され，活用されているか。

観点に係る状況（50 字以上） 各授業担当者により，展開予定の講義内容を反映した，適切なシラバスが作成され，活用されていた。他方で，その形式・記述内容にはやや一貫性がかけているとの指摘もあった。
根拠資料　シラバス，外部評価委員会

５－２－④：　基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。

観点に係る状況（100 字以上） オフィスアワーや授業後の相談，学生へのメールアドレスの開示等により相談しやすい環境形成がなされていたが，学生への具体的な対応は，個々の教員の工夫に委ねられているため，教員による濃淡があり，体系的・制度的な取り組みはなされていない。
根拠資料　シラバス，教員用自己点検・評価シート（様式２），外部評価委員会

５－３【学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ，それに照らして，成績評価や単位認定，卒業認定が適切に実施され，有効なものになっていること。】

５－３－②：　成績評価基準が策定され，学生に周知されており，その基準に従って，成績評価，単位認定が適切に実施されているか。

観点に係る状況（100 字以上） シラバスに従った成績評価，単位認定が行われている趣旨の回答が，各担当教員から伝えられている。試験に加えてレポート，講義への積極参加その他の複数の評価方法を組み合わせる科目もあり，適切に実施されていたと評価できる。

根拠資料 シラバス，教員用自己点検・評価シート（様式２），外部評価委員会

５－３－③：　成績評価等の客観性，厳格性を担保するための措置が講じられているか。

観点に係る状況（100 字以上） 成績評価に関しては，期末試験による客観評価に加え，事前に告知した複数の評価方法を用いるなどして適切な配慮がなされている。他方で成績分布に関しては，GPA の平均にばらつきがあり，一部の科目で S の割合が 10%をこえているなど，課題が残っている。
根拠資料　教員用自己点検・評価シート（様式２），外部評価委員会，成績分布資料

<u>基準６　学習成果</u>

６－１【教育の目的や養成しようとする人材像に照らして，学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について，学習成果が上がっていること。】

６－１－②：　学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して，学習成果が上がっているか。

観点に係る状況（100 字以上） 授業評価アンケートに基づく科目の評価は総じて高く，教員の工夫，熱意の水準は総じて高かったと評価できる（ただし全学のアンケートへの回答率は依然として低いものが多い）。学習成果が上がっていると推定できるが，受講生の一週間あたりの学習時間は多くなく，課題を残している。また本部会の提供する科目の性質上，客観的に学習成果を判定する尺度の形成には困難を伴うと言わざるを得ないが，今後の検討課題としたい。
根拠資料　シラバス，授業評価アンケート結果，外部評価委員会

<u>基準７　施設・設備及び学生支援</u>

７－１【教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され，有効に活用されていること。】

７－１－④：　自主的学習環境が十分に整備され，効果的に利用されているか。

観点に係る状況（50 字以上） 当部会の提供科目は講義形式が中心であり，講義室の施設・設備は映像設備等は一応整備されているが，学生の自主的学習環境については，参考文献や課題の提示によってその学習を促してはいるが，その学習環境については原則的には関与していない。ただし関連する文献や映像資料等で図書館に入っていないものは新規購入し，入れてもらっている。

根拠資料　シラバス，外部評価委員会，会員間電子メール

７－２【学生への履修指導が適切に行われていること。また，学習や課外活動等に関する相談・助言，支援が適切に行われていること。】

７－２－①：　授業科目のガイダンスが適切に実施されているか。

観点に係る状況（100 字以上） 授業科目毎に通常初回の講義でガイダンスが行われており，授業中の報告の事前チェックやレポート指導，さらにオフィスアワーなどを通して，学生の相談に応じる工夫が各教員により講じられており，適切に行われていた。
根拠資料　シラバス，教員用自己点検・評価シート（様式２），外部評価委員会

７－２－②：　学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており，学習相談，助言，支援が適切に行われているか。
また，特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり，必要に応じて学習支援が行われているか。

観点に係る状況（100 字以上） オフィスアワーの設定やメールアドレス等連絡先の公開，講義後の質疑応答時間などについて伝えることなどで，随時質疑応答に答える体制がとられており，学習相談，助言，支援については，相当程度適切に行われていると思われる。
根拠資料　シラバス，教員用自己点検・評価シート（様式２），外部評価委員会